

FD における e-ラーニングの活用

Practical use of e-learning in Faculty Development

大島 直廣

Naohiro Oshima

中央学院大学

Chuou Gakuin University

Email: n-oshima@cc.cgu.ac.jp

あらまし：FD とは一般的に大学の授業改革のための組織的な取り組みや方法を指す。e-ラーニングもその一つであるが実施対象は学生であり大学教員はコンテンツ作成や LMS の担い手である。

昨年は教員対象の e-ラーニングコンテンツ作成講習会を実施したが、概して大学教員は IT 機器の利用を不得手としているこしが判明した。そこで教員対象のコンテンツ作成手法を e-ラーニングで学ぶコンテンツ作成を試みたので紹介する。

キーワード：FD, e-ラーニング, コンテンツ開発, ビデオクリップ

1. はじめに

近年 FD(Faculty Development)として大学の授業改革のための様々な形態の取り組みがなされている。FD に関するセンターや委員会の設立、FD 講習会や FD 講演会などの開催もそのひとつである。

本学でも学生サポートセンターが設立され、学生の経済的な側面だけではなく教学上の様々な問題に対応できる体制がとられている。また FD 講習会や模擬授業、教員だけでなく職員も含む FD・SD 講演会と称する催しも開催されている。

昨年、本学においても FD 講習会の一環として「e-ラーニング講習会」が開催され、筆者はその講師を引き受けさせていただいた。その際、e-ラーニングの基本的なスキルである IT 機器の基礎知識が欠落している教員が多いことには愕然とさせられた。一番の原因は IT に対する「難しい……」との先入観があるように見て取れた。文系大学の宿命でもあるが、学生よりも教員の方が IT 機器に対する適応能力がないようにも感じられた。

しかし、教員に IT に対する適応能力がない訳ではなく、自分自身の授業に IT 機器の活用や e-ラーニングを取り入れようとする意欲、即ち FD に対するモチベーションをもち合わせていないことである。

それにも拘わらず数名の講習会に参加した教員から e-ラーニングを取り入れたいとの申し入れがあり、試験的にではあるが共同でコンテンツの作成してみることとした。さらに、過去に e-ラーニングのコンテンツ開発を行った経験⁽³⁾から、学生に対する e-ラーニングではなく、教員に対する e-ラーニングコンテンツを作成することを試みてみることにした。

2. FD の目的

そもそも FD の目的とは何か、何のために FD を実施するのが曖昧なまま、第三者評価機関の登場による一種の圧力と感じて⁽¹⁾多くの大学教員は FD

を「厄介なもの」と捉えてはいないだろうか。本来、大学の使命は専門性をもった高度な研究・教育にあることは誰もが認めるところである。多くの教員は研究に対しては何のインセンティブも存在しなくとも高いモチベーションと積極性をもっている。しかし、教育に対しては二次的であり一種の義務として受け取っている面が感じられる。

研究と教育は大学の両輪であるにも拘わらず教育に対する意欲やモチベーションは研究に対するそれと比較すると低いように感じられる。研究に対しては貪欲であっても教育に関しては無関心な面があるといえる。

FD と関連して大学教育の質保証がひとつの話題となっているが、そもそも教育の質とは何なのかは十分に吟味する必要がある。分かり易い授業とは易しい授業ではない。楽しい授業とはそもそも存在するのか。面白い授業とは笑いのある授業でもないはずである。また、教育の質は単に授業の物理的な時間によって保証されるものでもない。本来は授業の内容そのものにあるといえる。

大学教育の質とは大学生の学力の質であり、これを保証することは大学教育の水準を上げることに繋がる。FD はそのための教員自らが授業形式や方法など従来の教授方法を改革しようとする取り組みであるといえる。即ち FD の目標はそのための教員の自律的意識改革でもある。

3. e-ラーニングの現状

現在の大学における e-ラーニングの多くは学生を対象としたものである。IT 機器を使用して学生に多くの専門知識を学ばせようとする仕組みでもある。また、学生の質(学力)の評価と関連して IT 機器を利用する e-ポートフォリオなども e-ラーニングシステムの一つであり FD のひとつであるといえる。

多くの場合は授業の補助的な役割として、教材の

提示, マルチメディア教材の統合, 授業内の小テストなどに使用されている. 本学でもすべての授業を対象に WebClass を利用して下記のような e-ラーニングの活用の推進を掲げている⁽²⁾.

- ① 授業に必要な教材を事前に提示
- ② 教員によるテストの作成
- ③ 教員から学生へのレポート案内
- ④ 学生から教員へのレポート提出
- ⑤ 成績データの集計

IT 機器の利用は視覚的には非常に効率は良くなるものの学生側のデメリットとして「ノートが取れない」「何となく理解できた気になる」といった致命的な欠点があることも事実である.

しかし, ネットワーク環境の整備やモバイル機器の飛躍的な発展と普及により学生のモバイル IT 機器への依存度は大きくなっている⁽⁴⁾. また, 教員の側もワープロ機能, 表計算機能, プレゼンテーション機能を利用した授業設計が徐々にではあるが多くなってきている. ただし十分に使いこなせているとは言い難いものがある. これは当然であるが若手教員を除いては IT 機器で教わったこともなく, ましてや e-ラーニングや様々なマルチメディア IT 機器を用いた講義など経験したことがない. したがって FD としての e-ラーニングなどは想定範囲外であるともいえるのである.

4. FD への e-ラーニングの活用

そこで FD の一環として教員のための e-ラーニングを考えてみることにした. 手始めとして昨年の FD 講習会で実施した「e-ラーニングコンテンツの作成方法」をいくつかの短いビデオクリップとして, e-ラーニングシステムに載せることを考えた.

e-ラーニングシステムのコンテンツ作成はオンラインマニュアルを見ながらすればいいことではあるが, いくつかのコンテンツの作成例を短いビデオクリップとすることで必要なときに必要なコンテンツ作成ができる環境を整備することを考えた. そこには教員の側の「忙しくてできない」といった逃げの常套句を封印する狙いもそこには込められている.

FD のひとつとして実施した e-ラーニング講習会から一歩進んで教員自らが e-ラーニングを利用するための e-ラーニングコンテンツの作成である.

e-ラーニングの問題作成方法, 教材のシステムへの載せ方やその効果を簡単に解説したビデオクリップを作成した. 教材の提示方法として Word や PDF ファイル, PowerPoint ファイルなどの e-ラーニングシステム(WebClass)へ載せる方法を短いビデオクリップとして作成した.

またクリップの作成に際しては, 学生の演習における課題としてその多くを作成することとした⁽³⁾. これにより e-ラーニングシステム(WebClass)のマニュアルの一部可視化という結果をもたらした. 可視化の利点は誰にでも理解でき, 他人に頼らずひと

りで教材コンテンツを作成することができる点である. ビデオクリップ化に際しては Tech Smith 社の「Camtasia Studio 7」を使用し, 操作画面と撮影と音声による解説を挿入する手法を用いた.

5. FD の今後の課題

FD の課題は教員の自律的な努力の結果として改革を行うことである. 決して外部や上からの圧力で行うものではない. 大学の評価を気にした組織としての「守りの評価」ではなく教育の「攻めの評価」が求められるであろう⁽¹⁾.

FD とは何かはさておき, 大学における学生の学力低下は無視できないところまできている. これは学力の低下ではなく, 学生の学習意欲の低下が引き起こした結果であると考えたことの方が妥当である. 我が国の研究水準がどうであるかはここで議論することではないが, 大学の教育水準を上げなければならないことは言を俟たない. FD はそのための研鑽でなければならないであろう.

FD において e-ラーニングは授業支援ツールとして重要な役割を持っていることは確実である. また, 活用しなければならないツールであることも事実である. 大学における研究・教育, 特に教育について教員自らが教授方法や授業改革するたに着手しなければならないことは言うまでもないことである.

6. おわりに

FD の目的は大学の教育水準を確保するものである. 即ち学生の学力水準を高めるためであるといえる. 大学教員は研究業績には敏感であるが教育の質の向上には比較的消極的である. ここでは学生にではなく教員の教育力向上の一環として e-ラーニングを教員に適用することを試みた. その成果はまだ定かではないが, 無駄な試みではないと考えられる.

なお, コンテンツの素材や様々なヒントをいただいた丹羽香氏・水藤新子氏には深く感謝するものである. さらに両氏から提供していただいた資料は様々な要素を含みビデオクリップ化に際しても非常に参考になったことを付記しておく.

参考文献

- (1) 山内乾史:” 何のためのFDか?—イギリスとの比較—”, 高等教育ジャーナル—高等教育と生涯学習— 第7号 pp22-27, (2000)
- (2) 教育・学習支援への取り組み:“中央学院大学における e-Learning の活用”, Vol.19 No.1, (2010) 大学教育と情報(JUCE Journal) pp. 23-26
- (3) 大島直廣:“情報処理教育としての e-ラーニングコンテンツ開発”, 日本情報経営学会第 61 回大会予稿集 pp. 59-62 (2010)
- (4) 大島直廣:“WebClass 上での e-ラーニングコンテンツの開発”, 日本情報経営学会第 65 回大会予稿集 pp. 113-116 (2012)